

Wi-Fi、ケータイ

本校ではWi-Fi環境が整備されており、スマホの持ち込みも特に制限されていません。行事などでの連絡が容易になるのはもちろんのこと、探究活動などで研究を進める上ですぐに調べものをできるため、効率的に作業を進めることができます。このほかにも、SCHOLA活動を含めた様々な活動をスマホやパソコンを駆使して行うことができるので、校内で仲間と共にできる活動の範囲が広がります。



日常の遊び



始業前や昼休みに生徒たちが体育館や運動場に集まり運動を楽しみます。遊びを通して築かれる、学年や性別を越えた親密な関係は小規模校である附属高校ならではの魅力です。

制服

附属高校の制服は、自分らしさと集団としてのまとまりの両方を体現しています。夏は、自由な服装で自分らしく学校生活を送ることができます。これは先輩方が学校との協議の末、実現させたものです。このように生徒主体で活動する姿勢は、附属生が学校行事を全力で楽しむ秘訣でもあります。一方、冬には制服があります。制服が集団としての一体感を与えてくれるだけでなく、一目で附属高校だと分かる魅力的なデザインに惹かれること間違いなしです。



自由

授業外での学び

友達とzoomを利用した勉強会を行いました。1人だとだれてしまうこともありましたが、ビデオをつけることでお互いにやる気を貰いながら長時間勉強することができました！

授業外でも勉強に関する交流は盛んです。例えば、友達と既習範囲の復習をしたり、問題を出し合ったりしています。知識を再確認したり、友達の考え方を学んだりできます。

総合的な探究の時間

よりよい社会を作るにはどうすればよいのでしょうか？周りの課題に目を向け、解決する方法を模索するのが研究です。大人になってからも必要とされるその能力を養うため、総合では研究の方法を学びながら探究活動に取り組みます。

芸術祭

アートの力による豎町商店街の活性化を目指し、芸術祭を企画しました。振興組合や21世紀美術館の方々と会議を重ね、開催こそ叶わなかったものの、オンライン芸術祭の企画や関係者へのインタビューの公開など、多様な活動を展開しました。



好きなモノ

附属高校にはさまざまな分野に興味を持っている人がいます。そんな仲間たちと自分が興味のある分野を深める経験を附属高校では積むことができます。



数学研究同好会

普段は非公式ながらゼミ形式の活動で、皆の馬鹿話で難しい内容もよく理解しました。開校記念祭では有志発表、ポスター発表を行い全校の注目の的となりました。



先生との距離

先生に用事があった職員室に行くと、他の先生方とも自然と20分くらい職員室でしゃべるといことが多くあるほど先生との距離が近いです。

気軽に勉強を教え合える環境です。例えば、英作文を相互添削して、自分のミスを発見したり友達の表現を真似したりできます。談笑しながら学びを深められます。

平和町プロジェクト

本校が立地する平和町、その活性化を目指すのが平和町プロジェクトです。本校学生と商店街の大人が協力し、エコマップの作成や夏祭りの企画、運営などの活動を行いました。身近な地域について深く考え、実際に行動に移す経験ができます！



アイス販売

“余剰食品を減らすこと”を目標に、農家やパティシエの方と協力して、台風の影響で捨てられることになったぶどうと梨を使った2種類のアイスを作りました。1本170円のアイス80本を学校で販売し、そこでの利益は台風の被災地へ募金しました。



クイズ研究会

幅広い物事を扱うクイズは、実際に役立つものからそうでないものまで多くの知識に触れ、手に入る可能性を持っています。それは世界を見る解像度を高めるだけでなく、知ることの喜びとして我々の糧となるでしょう。

人工衛星ゼミ

専門家を交えて入門書を輪読し、超小型人工衛星の仕組みや、その利用法を学びます。テーマ毎に質疑応答を徹底して行います。教授が実際の部品や設計図を見せてくれることもあります。成果を活かせるコンテストに参加するのも良いです。

仲間

先生達は積極的に行事や部活に参加してくれるため、先生をより身近に感じられます！また、面談では私たち生徒の悩みをとことん聞いてくれるのでとても頼もしい味方です！

小論文の添削の際、大量の過去問を持って行っても、テーマや文書構成について議論を交えながら、丁寧に指導をしていただきました。お陰で志望校に合格できました。

3年間担任団が変わらないため、自分の性格をよく理解してもらえます。それ故、万人に共通するものではなく、生徒一人一人の性格に合った学習アドバイスがもらえます。

NJCとの協働研究

シンガポールのNJC（ナショナル・ジュニア・カレッジ）の学生と協働研究を行いました。新型コロナウイルスの影響で修学旅行の行き先が変更になり、現地での交流は叶いませんでしたが、zoomやSlackなどオンライン上で交流を深めることができました。文化の壁を超えたコミュニケーション能力が身につきます！



学校広報

私たちの生徒会活動は、新型コロナに大きく影響されました。特に大きな変化となったのは学校説明会の中止です。例年であれば、生徒会執行部が中学生に対してプレゼンを行います。私たちは代替案としてzoomを用いたオンライン説明会と学校紹介パンフレット及び動画の制作を行いました。これらの活動は、新たな伝統として現在も後輩に引き継がれています。附属高校は、活動方針や活動内容が生徒に一任されているため、「生徒が創り上げる学校」であるように感じます。

個性

能動的な授業

受験だけでなく卒業後にも生きるスキルや知識が身に付く工夫が全ての授業に施されています。県内最高峰の授業を向上心の高い先生や仲間と学べます。

授業は各先生がつくったプリントをもとに進められ、授業形式は様々です。生徒の能力を最大限に伸ばそうとする先生方の生徒への思いが伝わってきます。

授業の多くはプリントを用いて行います。授業内の口頭説明にも重要な内容が含まれているので、プリントの穴埋めに留まらず積極的に書き込みましょう。

深い理解を持った先生方の授業は、どの授業も学びが多いです。授業後の先生方、同級生との授業内容に関する議論で更に理解が深まります。

開校記念祭でドローンショー

新型コロナウイルスの影響で決定していたフィンランドへの長期留学が中止になるなど、挑戦しようと思っていたことが行えないなかで、開校記念祭は大幅な規模縮小となったものの開催できることが決まりました。そんななかで、なんとかこの行事を今までにない新しい形で盛り上げたいと思ひ様々なアイデアを考え、その中で私も面白いと思ひ尚且つ実現可能でインパクトのあるアイデアとして「プログラミング可能なドローンを編隊飛行させる」というものがありました。このアイデアは、高校2年の夏にプログラミングの学習を始め、家にあった1台のドローンをプログラミングで動かすことができた時に、もっと多く動かせたら面白いのではないかと考えていたものでした。資金面から技術面まで本当に数多くの課題を一つ一つ理解し、解決していくことが必要であり、プロジェクト開始から本番当日まで、空いている時間をほとんど全て使ってドローンショーに向けた準備を行っていきました。

本番は一度飛ばないというトラブルもありながら、仕切り直してなんとかやり切ることができました。多くの生徒や先生を喜ばせることができ、今までにない達成感を味わうことができたように思います。

このプロジェクトを通して、自分が技術を活用していくことに面白さを感じて

いることに気がつき、ドローンだけでなくプログラミングそのものや、AIといった様々な技術に関心を持つきっかけとなりました。また、それらの活用のためにはただ単にそれらの知識を駆使するだけでなく、資金面や様々な人との協力が不可欠になることに気がつき、物理や数学などの自然科学だけでなく、経済やマネジメントなどの社会科学まで包括的に学ぶことができる東京大学工学部のシステム創成学科を志す大きなきっかけとなりました。

(千代 航平)



附属高校に学食を!

本校では一年次にチームを組み、地域の課題解決を目的に探究活動をしています。「附属高校に学食があれば、昼食時の楽しみが増えて、日々の活動のモチベーションになる」という思いから、私たちは近隣の飲食店に呼びかけて本校で弁当販売をしてもらい、食を通じて地域の活性化と附属高校生の幸せを同時に実現することを目指して活動しました。最初は短期の試験販売を目標にして、弁当販売の仕組みをつくり、学校側と協議を始めました。話が進まない時期もありましたが、飲食店側と何度も協議を重ねることでより安全な販売システムにしていきました。途中、コロナの影響で販売実現を目前に、中止を余儀なくされました。しかし、それを乗り越え、1年半の準備の末に念願の弁当販売が実現した時は、言いようのない達成感がありました。また、多くの生徒・先生が弁当を食べて美味しいと言ってくれ、飲食店側からはコロナ禍でも売上げを確保できたと感謝され、とても嬉しかったです。さらに、自分の意志で決めた目標に向かって仲間と努力し、実現させたことは、自信に繋がりました。その自信は新しいことに挑戦するときの支えとなると感じています。また、大学の推薦入試では高校での活動が評価されますが、これらの経験やそれを通して得られた学びは、自分の強みになりました。

附属高校は生徒の可能性を最大限引き出してくれる高校だと思います。多くの人は最初からできないと決めつけ、挑戦すらしらないと思います。附属高校に入る前の私もそうでした。探究の授業は生徒全員に挑戦する機会を与えてくれます。また、意欲的な生徒が多く、自分に足りないところを補ってくれます。先生は生徒が新しいことに挑戦することに対して寛容で、力を貸してくれます。皆さんも附属高校に入学して、自らを過小評価せずに果敢に挑戦し、自分で決めた目標を実現させて欲しいです。

(繁実 梨央)



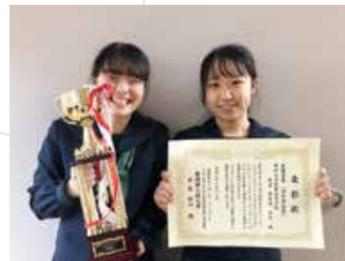
実現

社会課題解決に新たなる一手を!

私は、「inochi学生プロジェクト」を通して、世の中にある社会問題に興味を持ち、その解決を高校生の立場からでもできると学ばせてもらいました。このプロジェクトでは、全員が同じテーマに対し、グループごとにフィールドワークや調査を行い、課題解決を目指します。初めは、学校で行った探究活動の延長のような軽い気持ちで始めましたが、この活動を通してものづくりの面白さを実感できました。特に、「inochi学生プロジェクト」では、ただ問題解決をするだけでなく、実際に社会で活躍するエンジニアのお話を伺い、課題解決のアプローチ法を学ぶ取り組みがありました。その中で印象的だったのが、課題解決において最も重要なのは、解決策の考案ではなく課題の分析だということです。課題設定が本当に妥当か、この課題を解決することで生活が豊かになるのか、問題を感じている人自身も気づいていない潜在的な別の課題が存在しているのではないか。こういった疑問を、何度も議論し合った結果として提案が成立するのだということを教えていただきました。今まで自分が無意識にしていたアプローチ方法が、いかに間違っていたのかを痛感しました。それと同時に、今までなかったアプローチ方法で課題を解決することや、糸口が見つけれなかったテーマを別の視点から考え直すことの面白さに気づくことができました。

課題解決の難しさを実感し、何度も挫折しましたが、チームで意見を出し合い、納得のいくものを造り上げた経験は私を大きく成長させてくれたと思います。「inochi学生プロジェクト」を通して、ものづくりの面白さ、そしてそれを自身の手で行いたいという想いを抱き、大学では機械工学を学ぶ予定です。将来の目標が全く決まっていなかった私にとって、この活動で得た多くの学びは大きな決め手になりました。

(林 優希)



不登校に関する対話の場の提供

私は二年次に「不登校児童生徒の為に同世代だからできること」というテーマで探究活動を行いました。研究活動を行ったきっかけは、不登校の友人です。友人は「学校に行きたいけど行くことができない。周囲の人は理解してくれない」と悩んでいました。そこで、自分のような彼らと同世代の人でもできることがあるのではないか、と考え活動を始めました。まず、文部科学省が公表している文献の調査、アンケート調査、フリースクールの訪問等を行いました。調査から不登校の要因は多岐に渡ることを、不登校は甘えやサボりだといった偏見を持つ人も少なくないことがわかりました。また、当事者の中には、誰にも相談できず、辛い思いをしている人がいることを知りました。そこで、不登校支援や学校の在り方等のテーマについてオンラインで話し合う場を作り、その内容をSNSで共有することで不登校に対する理解が進むのではないかと考えました。一回目は主に県内で個人的にゲストを呼んだり、集客したりして開催しました。そして、発信などの活動を続けているうちに、自分と同じように、不登校児童生徒を取り巻く環境に課題があると感じている学生の方々と出会いました。みんな協力して活動したらより効果

があるのではないかと考え、共同でイベントを主催することにしました。準備の段階で失敗が続くこともありましたが、様々な方の支援、後援を受けて、二回目のミーティングを開催することができました。そして、地道な活動の結果、「不登校に対する考え方が変わった」などの声もいただきました。この活動を通して、学校教育以外の学びについての関心が高まり、障がいを抱える児童生徒や事情があって学校に通えない児童生徒の教育に携わりたいと考えるようになりました。今後は団体を正式なものにして、より多くの方が不登校について考えるようになることを目指して活動を続けていきたいです。

(皆本 来斗)



3年を終えて



文化祭で仮装した思い出

学力の高い人たちはもちろん多いですが、それ以上に個性豊かな生徒が大勢いて、それぞれの個性や長所を認め合っています。さらに、生徒の自主性を重んじる校風もあるので、自分らしい高校生活を送るのに最適な高校です。僕の場合「目立ちたがり」も1つの個性として受け入れてくれたことが何よりも嬉しかったです。この高校の文化祭では、生徒による歌舞伎の公演があるのですが、僕はそのキャストを演じるなかで、それを実感しました。人前に立てる喜び、そしてそれを講えられる喜びは、この高校でしか味わえない体験だったと思います。

(片山津中学校出身 末友 希要)

能登の小さな中学校を出て附属高校に進学し、三年間数多くの経験を得ることができました。全国総文入賞、NHK番組出演、アフリカ医学留学への切符、海外の高校生との探究活動。附属高校では好奇心と意思があれば何でも叶えることができます。貪欲に学ぶ同級生や日本の各分野の第一線で活躍しているOB、OGとの交流を通して自分の価値観が何度も覆され、人として大きく成長することができます。やりたいと感じたことを全て叶える三年間を過ごしたいのなら、附属高校は最高の場所だと思います。想像の何倍も「青春」できる場所ですよ！

(邑知中学校出身 中越 真央)



OGとテレビの生放送に出演

附属高校は僕の価値観を変えてくれました。全ての行事を生徒が創り上げる附属高校では、行動した分だけ解決すべき壁が立ちはだかります。しかし、少人数だからこそ生まれる密な仲間との関係が課題解決と自らの成長を支えてくれます。社会に関して興味のある生徒が多く、さまざまな視点からの意見が飛び交う刺激的で新鮮な環境のなかで、一度立ち止まって考え、物事を多角的にみる力が自ずと付きました。この力は様々な問題解決能力が求められる世の中に、不可欠な能力だと思います。それを高校で学べるのは石川県でここしかないと言えます。

附属高校は個性派の人が多く集まっており、相手を尊重し合う学校です。安心して自らをさらけ出し、のびのび自分を育ててください。

(兼六中学校出身 渡辺 孝)

最後まで挑戦し続けた3年間でした。入学前には想像できなかったアイス商品化やシンガポールの学生との協働研究など様々な機会に恵まれたことに加え、コロナ大流行も味わえました。思い通りにいかず失敗することの方が多くありましたが、それでも楽しかった印象が強く残っています。それは仲間がいたからです。他者を敬い、貪欲に学ぼうとする彼らがいなかったからこそ私も好奇心を抑えることなく好きなように活動できました。



趣深い背後からの視線

(光野中学校出身 向井 桃愛)

価値観が目まぐるしく変化する世の中で、学生のうちから現実を憂うよりも楽しさを追求、実現しようとする仲間と努力してきたことは大きな財産です。

僕は三年間ハンドボール部に所属し、部長も務めていました。附属高校の部活動は規模こそ小さいものの、生徒がしっかりと運営に携わっておりアットホームな部が沢山あります。また、開校記念祭の模擬店運営がクラスではなく部活動単位で行われていることもあり、部活動が学年の垣根を越えた親密な交流の場となっています。



人間bicycle

(野田中学校出身 白石玲於奈)

部活動に所属することで身体、精神の成長だけでなく、コミュニケーション能力や集団の中での統率力や団結力を磨き、人としての魅力が高められます。ぜひ部活動に入って学校生活とその後の人生を豊かなものにしててください。

私が本校を選んだのは、一学年120人という少人数で構成されていたからです。ここでは生徒数の少なさ故に得られるものを一部紹介します。本校では同学年の人数の少なさから、繋がりや濃さは縦、横共に他校に比べ一段と濃いものとなります。また、行事では少人数であるからこそ、一人一人に役割があり、その役割に責任が伴います。つまり、全校生徒一人残らず成長し、深く濃い人間関係を手に入れることができるのです。生徒全員が尊重される我が校で、皆さんがかけがえないものを手に入れることを願っています。

(金大附属中学校出身 古林 愛桜)



女バス青春中

学校住所および地図



交通手段：JR金沢駅から北鉄バス、香林坊経由金大附属学校前・自衛隊前行き



金大附属高校
公式マスコットキャラクター
「ふぞっくん」

卒業生がCMを作りました！



短編は表紙から！



金沢大学 人間社会学域 学校教育学類 附属高等学校

〒921-8105 石川県金沢市平和町1-1-15
TEL.076-226-2154 FAX.076-226-2150
Email: Kd-fuzokuhs@ml.kanazawa-u.ac.jp
<http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/kfshs/>